
騎士の証

鷹峰

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

騎士の証

【Nコード】

N8778B

【作者名】

鷹峰

【あらすじ】

主君を失った騎士クリフォードは、『まことの騎士』を捜しているという求めに応じ、好奇心で黒の森にそびえる館を訪れる。現れたのは、美貌の公爵夫人エスメラルダだった。その夜、クリフォードは彼女に誘惑されてしまう。抵抗するものの、その心は美しく聡明な貴婦人に惹かれていた。中世アイルランドを舞台とした騎士道物語。

前篇 まことの騎士

星灯りがひとつ、またひとつと灯る頃合。それに応えるよう、地上の家々にも心もとない光が灯る。途切れ途切れに風が奏でる旋律は、長い夜の訪れを呼びかけるかのようであった。

ここ東アルスターは厳冬の最中。夜の帳がひとたびおりれば、夜明けは隙間風程度に訪れるのみ。加え、相次ぐ戦乱で母なる大地は浴びるほどに血を吸っていた。

自由騎士ギルドでも、夜の訪れを歓迎するよう、酒を酌み交わす談笑がこぼれる。しかし、それは何処か刹那的で、酒で悲しみを洗い流そうとしているかにも感じられる光景だった。

彼等の多くは、相次ぐ戦乱に疲れ果てていた。

大小合わせて十とも二十ともいわれる小国が乱立し、最早どこに国境があるのかすら誰も記憶していない始末。更にギルドに集う自由騎士や傭兵の多くは、主君を失い途方に暮れている。

「おいクリフォード。」

そんな隅っこでちびちび飲んでねえで、こっちに来いや」

鎧をがちゃつかせ、大柄な男が杯を掲げる。顔には大きな傷がいくつもあり、いかにも歴戦の騎士といった貫禄だ。

「……遠慮する。酒は静かに飲むものだ」

カウンターの一番奥に座っていた若い騎士がそう答えると、大柄な騎士はつまらなそうに肩をすぼめた。

「何だあいつ、クリフォードっていうのか。見慣れない顔だな」

「ああ。何でもこの間陥落した国のどれかに仕えてたって話だぜ？」

男達の噂話にも耳を傾ける様子はなく、クリフォードと呼ばれた騎士は杯を煽る。

「あ、あの騎士さま……毎晩そんなに飲まれては、お身体に障ります」

「……うるさい。金は払っただろう」

冷や汗を拭いながら、深酒を諫めようとするマスター。しかし、鋭い眼光を浴びて竦みあがってしまった。

そのとき。

ぎい、と木が擦れ合う音。次いでがしゃん、と重い足音が続いた。

「あ、い、いらっしやい！」

マスターに一瞥されると、全身を甲冑で覆った訪問者は客全員をぐるりと見回す。そして、

「諸君に尋ねたいことがある。」

この中に、まことの騎士足りえる者はいるか？」

そう、唐突に切り出した。

飲んでいた騎士達がにわかに騒ぎ出すと、甲冑の騎士は一步、前へ進み出る。

「私は、リムリック公国太守ジェフリーの使いとして参ったものである！

我が主君は、真に信ずるに足るまことの騎士を求めておられる。我こそはという騎士は、その証を黒の森にて示せ！さすれば、最高の誉れと望みの恩賞を約束する」

朗々たる声が響き渡り、場はどよめき立つ。最高の誉れと恩賞それは、彼等が何よりも欲するもの、無理はない。

その中でただひとり、声の主をじっと凝視したまま、微動だにしない者がいた。

癖のついた亜麻色の髪、コバルトブルーの双眸。酔いが回っている為か瞼はやや重そうであるものの、精悍な面差しの青年。クリフォードだ。

「黒の森、川岸の屋敷にて待つ。ただし、」

一旦は去ろうとし、扉に手をかけようとした甲冑の騎士。しかし去り際、肩越しに振り向くと一言だけ添えた。

「偽りは、我が主君の最も忌み嫌うところである。」

騎士たる証を示せぬ者は、その首が胴に別れを告ぐと覚え置くが
いい」

金属の擦れ合う音がいくつか。甲冑の騎士が去った後も、男達は
その話で夜通し盛り上がっていた。

その一方で。
クリフォードだけは、訪問者が去ってもなお扉から目を離せずに
いた。

「黒の、森……」

甲冑で身を覆った騎士の姿が、彼の脳裏にはつきりと灼きついて
羨望か、或いは憧憬か、嫉妬か　主君も誇りも失った彼は、その
気高き姿に覚えた感情を形容する言葉を持たなかった。

人はそれを、好奇心と呼ぶ。

クリフォードの足は、遠く東　黒の森へと赴いていた。

酒浸りになっていた彼をこの地へ導いたのは、ギルドに訪れた変
化がきっかけだった。いつも口やかましくちよっかいをかけてくる
騎士連中が、こぞって姿を消したのである。彼にとつては静かに酒
を飲めるので好都合ではあったものの、ギルドに現れなくなった騎
士は皆、黒の森へ行くと言っていたという。

「……好奇心で命を落としたりなどしたら、『あの方』はお許しに
ならぬだろうな」

嘲るよう、独り言ちて。瞳を細め、懐かしそうに空を仰ぐクリフ
ォード。

総てを賭けて守ると誓った主君は、もうこの世界の何処にもいな
い。それなのに、自分は　何故、生き永らえている？

自分はひょっとしたら、死に場所を求めているのかも知れな
い。

そう思えば妙に合点がいった。もう、何もかも……どうでもよか
った。

「館というのは……あれか。」

鬱蒼とした森の中に、ぽつんと佇む屋敷。金持ちの道楽にしては、
手の込んだことだ　そう毒吐くと、クリフォードはその扉を叩い

た。

「失礼する」

建物の中は思いのほか手入れが行き届いており、意匠の凝らした調度品も見てとれる。青年はひと声かけると、誰かが出てくるのを待った。

「あなたは……自由騎士の方ですね？」

「……………っ!？」

現れたその人物に、彼は思わず息を呑む。てっきり、使用人が出てくるものと思っていたが、歩いてきたのは上品な貴婦人だったからだ。

白金を梳いたような長い髪は美しい曲線を描き、華奢な肩を伝って背中へとおちる。端正な目鼻立ちに、艶やかな珊瑚色の唇。すりとしたシルエツトに至るまで、名匠が創り上げた女神像さながらであった。

暫しその貴婦人に見惚れていたクリフォードだったが、相手が不思議そうに首を傾げていることに気づき、はっとして我に還る。

「あ、……………あなた……………は？」

極力平静を装い、尋ねる彼。しかし緊張と高揚感から、声の上擦ってしまった。

「リムリック公国太守ジェフリーの妻、エスメラルダと申します。

このような辺鄙な場所まで、ようこそお越しくございました。中へご案内しますわ」

言つて、婦人は奥へと促す。右足を前へと踏み出し、左足がそれに続いた。

「っ、妻？」

思わず口を出た言葉に、クリフォードははっとして口をふさいだ。既に歩き出していたエスメラルダはそこで足を止め、なにかと問い返す。まさに翠玉エスメラルダといったふたつの瞳が、青年を見つめていた。

「いつ、いえ、なんでも……………」

その、このような森の中に公爵夫人がおられるとは思わなかった

もので……失礼を」

口籠り、なんとかかそう言って誤魔化す。

考えてもみる。こんなにも見目麗しい女性を、男が見初めない筈がないではないか。

落胆する自分を、そう叱咤して。青年は彼女に続き、屋敷の中へと進んでいった。

部屋の一室に通されたクリフォードは、一通の手紙を差し出される。

「主人より預かったものです。騎士のかたが現れたら、渡すようにと」

婦人からそれを丁重に受け取ると、彼は手紙をひろげ、目を通す。手でこすったのか、インクがところどころ滲んでいた。また、うち一枚は地図になっている。

『まことの騎士たる者へ

まずは、遠きこの地への来訪を歓迎する。私は本国から離れることができぬ故、妻にこの手紙を託した。どうか、非礼をお許し願いたい。

我がリムリック騎士団が求むるのは、まことの騎士。貴殿に、その証を示すことを請う。

朔の日、スレイブニルがレンスターを巡る刻 約束の地にて、我が騎士団唯一の騎士と一騎打ちを行い、勝利してみせよ。それを、まことの騎士たる証とする。証を示せし騎士には、最高の誉れと望みの恩賞を与えることをリムリックの名において誓おう。

貴殿が騎士の証を示し、我が前に姿を現す日を楽しみにしている。

リムリック公国太守ジェフリー』

手紙を読み終えたクリフォードは、はふ、と肩を落とす。

(……本当に、随分と手の込んだことをするものだ)

腕の立つ騎士を捜すだけならば、こんな勿体ぶった真似をする必要などない。とんだ道楽に付き合わされたものだと、彼は内心、頭を抱えた。

目の前で静かに微笑む美しい女性　エスメラルダが、彼の人物の妻というのも、気に入らない理由のひとつだろう。

「朔……新月の日ということは、五日後ですか」

スレイブニルは、太陽の馬車を引く八つ足の馬。レンスターはここから真っ直ぐ南。つまり、『スレイブニルがレンスターを巡る刻』とは、太陽が南中する時間帯　正午。

（まったく。物言いまで持って回って……公爵というのは、どれだけ嫌味な男なんだ？）

「どうか……なさいましたか？」

エスメラルダの声にはつとして、クリフォードは彼女へと向き直る。ひとつ頷くと、手紙を彼女の手に戻した。

「約束の日まで、ごゆっくり滞在なさってください。

……ではクリフォード様、こちらへ。お食事を用意しております」
言われて、身体が空腹を訴えていることに気づくクリフォード。

そつえばこの場所を見つけるまで、森で少し迷っていたのだった。

「かたじけない」

夕食と呼ぶにはやや遅い時間帯。婦人の申し出に、彼は心から感謝した。

クリフォードの前に、色とりどりの料理が並ぶ。果実酒にアイリッシュシチュー、牡蠣の酒蒸し、肉の腸詰め。テーブル一杯にご馳走が並んでいた。

「お口に合えば宜しいのですが」

「恐縮です。」

ところで……公爵や、使用人の姿が見えませんが」

先程から、公爵夫人エスメラルダ以外に人の姿を見かけない。まったく人の姿がないというのは、不自然を通り越して奇異ですらあ

る。婦人は口元に手をあて、あら、と表情を崩した。

「今この屋敷にいるのは私と貴方、ふたりだけですわ。クリフォード様」

穏やかに告げるエスメラルダに、青年は、え　と思わずフォークを取り落とす。

ふたりつきり。

知らず、相手の姿を盗み見て　何かを振り払うようにかぶりを振った。

「で、では、この料理は？……まさか、」

「はい。私がすべて作りました」

クリフォードは驚き、目を丸くする。こんな森に婦人ひとりを残し、使用人のひとりも寄越さないとどうしたことだと思知らぬ城主に怒りを覚える。しかしそれでも、婦人、次いで料理に視線を移し　喜びが胸に湧き上がるのを確かに感じていた。

「遠慮せず、沢山召し上がってくださいませ」

長旅でかれこれ数日、食べ物をお口にしていなかったクリフォード。彼女の言葉に甘え、とにかく空腹を満たすことにした。何を喋ってよいものか、計りかねたという理由もある。口下手な彼は、結局ろくに会話もないまま最初の晚餐を終えるのだった。

部屋を宛がわれた青年は、そこに上質なベッドを見つける。

布団に潜り込み、毛布を鼻まで上げると、ぼうつと天井を眺めていた。

「エスメラルダ……さま」

その麗姿を頭に呼び起こす度、陶酔感が胸を熱くする。それはどんな美酒よりも、深く沁み入った。

それにしても、と彼は考える。貴婦人が見知らぬ男と面会するのであれば、肌を隠し、首元まで覆ったドレスを身に纏うのが普通である。しかしエスメラルダの装いは、肩や胸元を大きく開けたドレスだった。

と、軽いノックの音に閉じていた瞼を開く。
クリフォードは飛び起きると、慌てて周囲を見回す。

(……ゆ、幽霊ッ?)

背筋が凍る。ひよつとして、帰って来なかったという自由騎士の亡霊か、いや、まさか。そんなことを考えていると、部屋のドアがからり、と開いた。

「ひっ！」

「きゃ……っ！」

……『きゃ』?

「え、エスメラルダ様!？」

現れたのは、先程思いを馳せていた公爵夫人その人であった。夕食時に後ろで結っていた豊かな髪をおろしていたため、印象は幾分か異なっていたが。

「し、失礼。既にお寝みかと……な、何かあったのですか？」

気恥ずかしさに早口になる。まさか幽霊かと思つて驚いたとも言えず、話題を逸らした。

婦人は気にしたようでもなく、こつ、こつと歩み寄ってくる。思わず一歩、後退るクリフォード。

「ご迷惑……でしたか？」

伏し目がちに、僅か俯くエスメラルダ。髪がさらり、と頬にこぼれる。

「あ、い、いえっ、そういうわけでは……」

「では、」

いつの間にか、彼女は青年のすぐ隣、ベッドに腰をおろしている。少女のような面差しが、ふわり、ほころんだ。

「すこし、お話をしても構いませんかしら。クリフォードさま……」

……その、私、何だか眠れなくて……」

追い返すわけにもいかず、クリフォードは狼狽した。しかし促されるまま、ベッドを椅子代わりにして腰かける。そして、直ぐに後悔した。

エスメラルダの頭が、青年の肩に沈む。彼の心臓は跳ね上がり、思わず声をあげそうになった。甘い花のような香りが鼻孔をくすぐる。

「え、え、え、エスメラルダさ」

「……ねえ、クリフォードさま」

耳元で名を囁かれ、金縛りのように動けなくなるクリフォード。大きなふたつの翠玉に、その心はがっしりと捕らえられていた。

「どうか、なさいまして？」

肉刺だらけの手に、そつと白い指がかさなる。

「あ、いえ、その……っ」

自分は、この婦人にかかわれているのだろうか。混乱する頭の隅で、そんなことを考える。彼女は既にひとのもので、生真面目な騎士にとつては手の届かない存在。ましてや情を交わすなど、思いもよらないことであった。

「その、きよ、距離が……近……」

吐息がかかる程近くに、エスメラルダの美貌があった。顔立ちは十代後半の少女のように伺えるが、それにしてはいやに艶かしい。じり、と身を引くクリフォード。しかし、その言動とは裏腹に、視線は彼女の艶やかな唇に釘付けとなっている。

知らず、ごくりと喉が鳴った。

視線はそのまま、細い首筋を伝って胸元へおちる。白い胸の谷間は、たわわに熟した果実のようで。ドレスの薄い布地からは豊かなふくらみが見てとれ、青年はしまったという顔をした。

触れたい。どんなにそう思っても、相手は既婚者、それも下手すれば主君の妻になる女性。手を伸ばすことなど、叶うはずもなかった。

「……きや、ご、ごめんなさい」

一瞬、何が起こったのか理解できなかっただろう。気がつけば、クリフォードの腕の中に彼女が、いた。

「な、な、な……あ、あのっ」

改めて見れば、彼女が体勢を崩して倒れこんできたのだと理解する。本能がそのまま抱き寄せることを求めたが、それは却下した。

「も、申し訳ありませんっ！その、そんなつもりでは」

エスメラルダの身体を引き剥がす彼は、酷く動揺していた。頬から耳まで見事に茹だっており、指などは小刻みに震えている。

「……ええ。存じております」

ただ穏やかにそう返す彼女は、外見に反し、とても大人びて見える。

「クリフォード様が誠実な方だということは、よく判りました」

そう告げると、エスメラルダはゆっくりと立ち上がり、扉へと歩き出す。

「え、あ、あの？エスメラルダ様!？」

「ごゆっくり、お寝みなさいませ。クリフォード様」

静かな足音はやがて、扉の向こうへと消える。

「ぱたん、と。扉の閉まる音が、いやに遠く届いた。」

「……なんだったんだ？俺……何かしたのか？」

心臓はなおもばくばくと早鐘を打ったままである。クリフォードは取り敢えず再び布団へ潜ったが、寝つける自信は皆無だった。

ぼんやりと、天井の模様を目が追う。瞼を閉じても模様が浮かぶくらいになった頃、漸くぼつり、彼は呟いた。

「ひよつとして……俺、試されてたのか？」

物言わぬ扉は、何も答えてはくれない。

『まことの騎士たる証を示せ』

甲冑の騎士が、手紙の主が発したその言葉が。ぐるぐると彼の頭で反響していた。

中篇 美しき公爵夫人

翌朝。身支度をして部屋を出ると、あの美しい婦人が出迎えてくれた。

「おはようございます、クリフォード様。

昨夜はよく眠れましたか？」

「え、ええ……まあ」

答える青年の目には、くまができている。彼女はそれを知ってか知らずか、食卓へ手を指し示し、こう言った。

「朝食の支度ができております。どうぞ」

見れば既に、食卓には香ばしいパンや香茶が並んでいる。クリフォードは感激しながらも、申し訳なさそうに頭を下げる。

「私のような者の為に、何もあなたがそのようなことをされずとも

……

宜しければ、次からは私もお手伝いします」

「いいえ、ご心配なさらずとも大丈夫です。料理をするのは好きですから」

しかし　と食い下がろうとするが、勝手な真似をするわけにもいかない。そもそも、彼に料理の心得があつたわけではない。素直に相手の言葉に甘えるしかなかった。

そうして食事の時間が訪れる度、婦人の心がこもつた手料理を振舞われる。クリフォードは不謹慎だと思いつつも、心の奥では幸せを感じていた。

緊張を解く為だろうか。食卓で、エスメラルダは様々な話をクリフォードに聞かせてくれた。

「クリフォード様は、レンスターのご出身でいらつしやいますの？」

「は？……え、ええ。私のことをご存知のですか？」

食事の手を止め、クリフォードは首を傾げる。出自について、まだ彼女に話したことはなかった。

「いいえ。クリフォード様の歩き方や礼法が、レンスター式の作法に見えましたもので」

確かこうして頭を下げるのは、南域レンスター特有の作法でしたでしょう。と、かつて婦人にしたそれと同じお辞儀を試みせる彼女。

「はい。そんなことまで知っておいでとは……」。

仰る通り、私はつい先月まで、キルケニー公国に仕えておりました」

クリフォードはすっかり、エスメラルダの博識っぷりに舌を巻いてしまった。

「そんな。偶然聞いただけですわ。そう、キルケニーに……」

キルケニー公国に起こった悲劇を知っているのだろう、婦人はやや声を潜める。

「……無念です。」

大恩あるダリウス卿に報いることもできず、私は今もこうして生き永らえている」

だむ、と青年の拳がテーブルを叩く。

クリフォードを側近として重用し、息子のように可愛がってくれたダリウス公爵。民衆の支持も高かったが、他国の侵略に遭い

国と共に、散った。

「ダリウス卿のことは、私も存じております。卿は……最後まで戦われたそうですね。」

キルケニーの麦酒を飲んだことがないと私が言ったら、次にリムリックを訪れる際は手土産に馬車一杯積んでくると……それは楽しそうでしたのに……」

「……はは、あの方ならば馬車一杯積んでも一人でおなかに入れてしまいそうだ」

話題が尽きることはなかった。エスメラルダは自身の知識の豊富さを鼻にかけることもなく、また、主を失ったクリフォードを気遣い、激励することも忘れなかった。

「ダリウス卿の側近であったことを、あなたはもつと誇っていいはずだわ」

「はあ……しかし、私など至らぬ点ばかりで、とてもとても……」話をすればするほど、エスメラルダに惹かれていく自分を、クリフォードは感じていた。

こんな美しく聡明な貴婦人を、妻とすることができたらどんなにいいだろう。

彼女を娶ったというジェフリー卿に対し、心は嫉妬を覚えずにいられない。決闘、そしてそれまでの時間が自分への試験だというのなら、それを越えてやるうじやないか　そう、彼は固く決意する。（どんな男かは知らぬが、必ず鼻を明かしてやる）

そう決めてからは、空いた時間を訓練時間に割いた。素振りをする音は、月が沈むまで辺りに響いていた。

肉刺がつぶれ、掌が僅かに出血していた。

「そろそろ休んでおかないと……朝食の時間に遅れてしまうな」

クリフォードは部屋へ戻ると、槍と剣を壁に立てかけ、布団に潜り込む。折角食事を用意してくれるのに、遅れるのは礼を失すると考え、直ぐに寝むことにした。ところが。

昨夜と同じように、軽いノックの音が彼の耳に届く。クリフォードは飛び起きようとするが、部屋を訪れたエスメラルダに制止された。

一歩、右足を踏み出す。左足の踵を右足に重ねたところで、呆れたように眉尻を下げる。

「……やっぱり」

溜め息をこぼし、エスメラルダは再び右足を部屋の絨毯へ踏み出した。やがてベッドに腰をおとし、クリフォードの手を眺め遣る。

「手が肉刺だらけですわ、こんなにつぶれて……痛むのでは？」

肉刺だらけの手を貴婦人が取ったことに動揺し、慌てて答える。

「いえ、こんなもの大したことはありません」
「いいえ、いけません。きちんと手当てをしておかないと、悪くなることもあるのですよ」

彼女が取り出したのは、薬草のようだった。右手で青年の無骨な手首を掬い、左手に持った葉を出血した掌に容赦なく摺りつける。ぐ、と思わず呻くクリフォード。

「少し、染みるかも知れませんが、直ぐに快くなりますわ」

「は、はい……薬草にも詳しいのですか」

これには流石に恐れ入った。こんなに物知りな女性を、クリフォードは未だかつて見たことがない。独身であれば口説いていたと言いたいところだが、奥手な彼にそれが為せたかどうかは疑わしい。

大人しく手当てを受けていた青年だったが、

「え、エスメラルダさ」

掌に、薬草とも相手の指とも異なる柔らかな感触を感じ、ぎよつとする。

彼女の、唇、だった。

「……………ま」

余計な考えを、とにかく頭から追い出そうとする。しかし、

「クリフォード……さま。わたし……」

肉刺だらけのその掌を、彼女は 自分の胸に押しあてる。

(……………う)

強引に手を引き剥がせば、彼女の指、或いは心が傷つくかも知れない。どうすることもできず、クリフォードはされるがままになっ
てしまった。

「な、な、な、なりません、そんな ツ」

しかしそれに反して、男としての本能は、指を……その胸に埋めることを要求してくる。役得どころか これでは、蛇の生殺しだ。そんなこと、認められるはずがない。

こんな真似までして、自分を試すというのだろうか。

「わたし……ほんとうは、
まずい、と、心の中で叫ぶ。

この続きを聞けば、自分は 欲望を、抑えられなくなってしま
うかも知れない。

「あ、あのっ、エスメラルダ様」

「結婚など……したくなかったのです！」

……どくん。

「そ、それでは、何故……？」

男の問いに彼女は、俯いて、それは と口籠る。何か事情があ
るのだろうと察し、クリフォードはそれ以上、問い詰めることはで
きなかつた。

「……出過ぎた真似を、いたしました」

彼女は瞼を伏し、いいえ、と首を振る。それから、何処か思いつ
めたように、男へと寄り添った。

「私の、心の中にいる殿方は……」

朝露を帯びた花弁にも似た唇が、告げる声色が、男から理性を奪
う。彼女はそれに気づいているのか否か、ますます無骨な男の手を、
自分の柔らかな胸に押しつける。

そつと、唇を寄せてくる彼女。

「……あ、ああ……ッ」

平静を保つのも、もう限界だった。それでも荒くなる呼吸を気取
られぬよう、必死で抑えるが、胸の感触とちらつく唇が、それを許
してくれない。

不埒な男だとは思われなくなかったのだ。……彼女にだけは。

「クリフォード……さま。

私を……受け入れてくださいますか？」

甘いささやきが、理性を麻痺させる。

(……む、胸が……唇が、こんなに、……こんなに)

もう、我慢も限界だった。あとすこし、顔を近づけるだけで。あ
とすこし、指に力を込めるだけで。その甘い蜜を、甘い果実を

「エスメラルダ……さま。私、は……ッ」

ぱつと、その細い肩を引き寄せ、抱き締めようとする。男の力だった。エスメラルダは一瞬、驚いたように目を見開く。しかし、ばさばさどさどさっ！

騒々しい不協和音で、男　クリフォードは、理性を引き戻された。

蝙蝠でも木から落ちたのだろうか。思わず二人は窓に眼を向ける。それから。

「……………あ。」

も、もも申し訳ありませんっ！！」

クリフォードは掴んでいた腕を放し、後ろを向いて布団を引っ張り寄せる。相手を直視すれば、折角戻った理性を再び失うことになるのは目に見えていた。布団で乱雑に腰までを覆ったのは、若い男ならば当然の生理現象を彼女に悟らせない為である。

「クリフォード様。……………私のこと、お嫌いですか？」

「そ、そんな！滅相もない！」

相手の口調が少し、沈んでいる。クリフォードは焦った。傷つけたらどうか、と。

もし、あの甘い告げ言が畏だったとしたら、自分は叱責を、蔑みを、或いは死を覚悟しなければならぬだろう。

しかし、もしそうではなく、彼女の本心だったとしたら　誘惑に应じること、彼女を傷つけることもできない。女性の扱いに長けているとはお世辞にもいえない青年にとって、八方塞がりといえる状況だ。

「ほんとう……………ですか？」

私のことを、あばずれ女と思ったわけではありませんか？」

「そんなこと！私には……………あなたはそんな方には映りません」

それは、偽らざる本心だった。彼女の真意が何処にあるにせよ、男と見れば色目を使い外見ばかりを飾る女達とは、彼女は違う。少なくともクリフォードはそう信じていた。

「……嬉しい。」

あの、少し……飲みませんか」

「え。は、はい……」

彼女が持ち出したのは果実酒だった。何か拙いことを言ったのではないかと、相手の顔色を伺う。だが、戦場しか知らぬクリフォードにそんな芸当はできなかった。

「不思議ですか？」

数多の騎士がここを目指したことはご存知なのでしょう。でも、ここにいる騎士はあなただけ」

「それは……まあ」

どんな恩賞を賜ろうかと騒がしく話していた男達は、建物の何処にもいない。確かにそれは、不可解ではあった。

「幾人もの騎士が、この館の門を叩きました。しかし」

そこで、静寂がおちる。彼女はそれ以上、何も言わなかった。

(……『試練』に脱落したということだろうか)

そんなことを、頭の隅で考える青年。

杯を傾けると、甘酸っぱい果実酒の風味が喉に心地好い。ほう、

と感嘆の声を漏らし、まじまじと杯を眺めた。

「食事のときも、そうなさってましたね。果実酒は珍しいですか？」

「え、ええ……祖国ではほぼ麦酒でしたし、自由騎士ギルドには、こんな洒落たものはありませんでしたから」

物珍しそうにしていたのが気恥ずかしく、クリフォードは若干早口になる。そんな彼を、婦人は微笑みながら眺めている。

「ふふつ。お口に合いませんか？」

「いえ、そんなことは……。その、好き……です」

それはよかった　と言って、エスメラルダは空になった青年の杯に果実酒を注ぐ。

二人は時間を忘れ、しばし語らいの時間を過ごす。婦人が静かになったことに気づき、クリフォードはどうしたのかと声をかけようとする。そのとき、こつんと肩に何かがおちた。

「……エスメラルダ様？」

返事はない。代わりにあったのは、静かな呼吸　　寢息だった。
青年の肩にさりりと流れたのは、彼女の長い髪。

「な、ね、眠って……？」

ベッドを椅子代わりにして座っていたエスメラルダは、そのまま
布団の上に転がってしまう。猫のようだ　　と不意にクリフォード
は思ったが、そんなことを考えている場合ではない。

「あ、あの……その……」

「……うう、ん……」

彼女が身をよじれば、服が乱れ、丸い肩が露になる。捲くれたド
レスは白い太腿を露にし、一度は辛うじて収めたクリフォードの欲
望を焚きつけた。

『今この屋敷にいるのは私と貴方、ふたりだけですわ。クリ
フォード様』

こんなときに、よりによって脳裏を掠めるのは、彼女のあの台詞。
相手が目を覚ます気配はない。ならば　　と、男の中でささやく
ものがある。

「……ばかな。そんなこと、」

振り払うには、今の彼女の姿はあまりに無防備すぎた。

(エスメラルダ……さま……)

身体がぼうつと熱を帯び、抑えがたい衝動が疼く。宵闇が辺りを
包み、ランプの頼りない灯りの中で、彼女の白い肌はあまりにも、
目映まばゆすぎた。

思えばそもそも、自分は死に場所を求めていたのだ。ならばいつ
そ、ここで、浅はかな想いごと果ててしまえたら

相手の顔、その側に手をつき、身をベッドに乗り出す。

……と、生唾を飲む。

どんな罰も覚悟できた。この腕に彼女を抱くことができるなら、
このまま冥府へ墮ちても構わないと、男には本気で思えた。それほ
どに、渴望していた。

もう片方の手で女の手首をおさえ、そのまま身を沈めようとした、刹那。

からんからんと、金属音が耳に響いた。

見れば、床を愛用の槍が転がっている。それは徐々に減速し、クリフォードの足元で、停止する。

「……………」

その槍で、かつて彼は絶対の忠誠を主君に誓った。

『ダリウス卿の側近であったことを、あなたはもっと誇っていいはずだわ』

はつとして、エスメラルダの顔に目を戻す。無論、彼女は未だ夢の中だ。

「……………わたし、は」

自噴の念に唇を噛む。僅か、鉄の味がした。彼は床の槍を拾うと、元あつた壁に立てかけ直す。

それからエスメラルダの華奢な体躯を抱え上げ、部屋へと送り届けた。

「お寝みなさいませ。……………エスメラルダ様」

クリフォードは静かに扉を閉めると、自室へ戻り、再びベッドに潜る。甘い残り香に、眩々するのを感じながら

後篇 君がために

それからも婦人は毎晩、クリフォードの部屋へ現れた。彼は夜毎
続く誘惑に必死で耐え続け、そうして 四日目、最後の長い長い
夜も、過ぎていった。

五日目。決戦の日が、漸く訪れた。

目のくまは、より一層濃く、深くなっていた。クリフォードの瞳
は鋭く、何処か虚ろな光を宿す。

心は決まっていた。

リムリック騎士との決闘に勝利し、それからジェフリー公爵に挑
むこと。そして公爵に勝利し 恩賞として、公爵夫人エスメラル
ダを求めること。

(必ずや 刀の錆にしてくれる……！ふ、ふふふふふふ)

寝不足その他の事由で、いつになく気が立っているクリフォード。
完全に目が据わっていた。

彼は婦人に見送られ、地図に書かれていた『約束の地』へと赴く。
リムリック公国髓一の騎士を用意すると、ジェフリー公爵の手紙
には書かれていた。しかしどんな相手が現れようと、彼には負ける
気がしなかった。

「こんな、巫山戯た真似を……」

鬱蒼とした森を往くと、不意にひらけた場所に着いた。

どうやらここが、相手から指定された地点のようである。確かに
障害物もなく、一騎討ちには最適といえよう。見上げると、太陽は
高く高く昇っていた。

「もうそろそろ、か」

腰に差していた剣を手に、じつと決闘相手を待つクリフォード。

木々のざわめきに、足音らしきものが交じる。そこには

「……………はっ？」

思わず間の抜けた声を漏らすクリフォード。森の中から姿を現し

たのは、えらく怪しい風体の人物だった。というのも、チェインメイルのみという軽装にも拘わらず、頭部は物々しい甲冑で覆われている。左手には細身剣を携えていた。

クリフォードは思わず、一步、後退る。もしこんな人物が同じ部隊にいたら、間違っても並んで歩きたくはないところだ。頭の甲冑さえなければ普通の軽剣士姿だが、その一点があまりにも珍妙な存在感を醸し出している。

木々の切れ間から覗く空には太陽が煌々と輝き、影は真つ直ぐ足元に。場所も間違いない。つまり　この怪しい人物と、決闘をしるということだろうか。

尋ねようか逡巡していると、相手はひゅん、と剣先をこちらへ向ける。間違いなさそうだ。

冗談ではない、とクリフォードは憤る。怒りそのままに、相手へと投げつけた。

「何だ、その怪しい格好は。戯れも大概にせよ！」

しかし相手は何も言わず、剣を構えこちらを待ち構えている。

「く……。我が名は、キルケニー公国クリフォード。」

リムリック公国の騎士よ、　相手になろう」

正直なところ、早々に終わらせて仕舞いたいというのがクリフォードの本音だった。少なくともこの状況を、彼は騎士として屈辱に感じていたのである。

「ゆくぞっ！」

若き騎士は、吠えると共に突進していった。

先ずは、正面から斬りつける。相手は剣でその軌道を逸らしてから、横へ跳び退く。

（　成程、身軽さを売りとした軽剣士だな。ならば……！）
そう目測を立てると、再び間合いを詰める。幾つか、金属の重なる音が森に木魂した。

間合いを整える暇を与えず、ひたすらに追撃するクリフォード。
「させるかっ！」

時間と間合いをあければ不利になる。そう考えた彼は、力押しで一気に決着をつけようとした。装甲のお陰で、多少食らった程度では倒れはしない。

ひゅん、と掠めた剣閃が、青年の頬に紅いラインを引く。牽制するように装甲の浅い二の腕や腹部を斬りつけられるが、彼は一步も退かぬどころか、更に前へと向かっていく。

進むクリフォードの気迫には、鬼気迫るものさえ感じられる。徐々に徐々に、相手は圧されはじめていた。

がつ、と。足場が悪く僅かに体勢を崩す剣士。その、ほんの一瞬の隙を衝き、クリフォードは大きく踏み込む。

そして。

「そこだツツ!!!!!!」

気合一闪、相手の甲冑を剣で跳ね上げた。

……からららああああああんと。

まるで決着を報せる鐘のように、乾いた音がその場に響き渡る。

剣士の甲冑が、美しい放物線を描いて宙を舞い、やがて、二人の足元を転がっていった。

そのまま相手の喉下に剣先を向けようと、して。

「……………、な」

甲冑の中に隠れていた相手の顔が露になり、クリフォードは絶句した。

「何故、あなた……………が、」

それだけを、何とか言葉にする。しかし相手は清々しい笑みを湛え、そんな青年を眺めていた。からん、と細身剣が左手を離れ、大地に臥す。

「私の負けです。流石ですね、クリフォード」

その面差しを、見紛うはずもない。

「エスメラルダ……………さま……………」

流れる白金の髪、翠玉の双眸。そこに佇んでいたのは、あの麗しき貴婦人エスメラルダであった。

彼女はその名を呼ばれ、眉を潜める。

「クリフォード。あなたを騙っていたことを、私は詫びねばなりません」

「騙していた……？」

わけがわからないといった顔のクリフォードに、美貌の剣士は重く頷く。

「エスメラルダというのは、偽名です。」

私は、リムリック公爵夫人などではありません。それに、公爵は独身です」

よく通る声が、青年の耳に届く。館で聞いた柔和な声音とは、違った響きをもって。

「で、では……あなたは一体」

「その前に。私の前で、誓いを立ててくださいますか」

何者なのかと、投げかけようとした問いは遮られる。

「あなたに嘘を吐いておいて、身勝手は重々承知です。ですが……」
つい、と。戸惑うようにその瞳が揺らぐ。しかし何かを決意した

ように、彼女は真つ直ぐ、クリフォードの目を見てこう続けた。

「私を信じ、その剣を捧げると。あなたが騎士の名誉のもとに誓えるのならば。」

私はあなたに、すべてをお話します」

「……………は？」

数度瞬き。話が唐突過ぎて、どう答えたものか返答に詰まるクリフォード。

「それは……あなたに仕える、という意味に受け取って宜しいのですか？それとも、素性も知れぬ公爵に仕えるということですか？

何処の誰とも知れぬ者に、いきなり仕えろと申されましても……

私は正直、応じかねます」

あの手紙を読まされたときからずっと頭にあつたことを、彼は口にした。この人物こそはと認めた主君でなければ、仕える気には到

底なれなかったのだ。

「では、私になら仕えてもいい　と？」

「は……？それ、は」

彼女はじつと、答えを待っていた。こほん、と咳払いをし、クリフォードは翠色の瞳に映った己の姿を見る。

「はい。あなたに……なら」

青年の首が縦におちるのを見れば、エスメラルダと名乗っていた婦人は満足げにこう言った。

「わかりました。それで、充分です」

彼女はふと空を仰ぎ、それから改めて視線をクリフォードへ戻す。

「リムリック公国太守ジェフリー。それが……私の本当の名です」

「……………。はい？」

思わず耳を疑うクリフォード。そんな話を、信じろというのだから　と、如実に表情が物語っていた。それに、屋敷で見た彼女の姿はどう見ても女装ではない。自分の意思でないとはいえ、その身体に触れてしまったのだ、間違いなかった。

「ええ。女の身で家督を継ぐことは認められていません。ましてや長子が女であれば、死産であったものとして殺されるのが常。」

故に私はジェフリーと名づけられ、この身を男と偽り……この日まで生きて参りました」

凜とした眼差しが、クリフォードを射抜く。今までに見たどんな騎士より、諸侯より、強い瞳がそこにあった。膝を落とした彼女

公爵の左手が、剣を拾い上げ、鞘に収める。

「なればこそ……このような手の込んだ、回りくどい真似をする必要があったのです」

確かに、そう考えればすべての説明がつく。

ジェフリー公爵は、姿を現さなかったのではなく、現せなかったのだ。そして、使用人を置かず、たったひとりで騎士を出迎え、誘惑までしたのは……彼女の素性を知っても『騎士』として仕えることができるか、試していたのだらう。それについては、後ろ暗さが

ないでもないが。

それに。

「あなたの歩き方を見て……妙だとは、思っていました。

右足を踏み出して、左足を揃え、また右足から歩き出す。あれは、剣を扱う者の作法だ」

青年の指摘に、男装の麗人は目を丸くする。

「……驚きました。優れた観察眼ですね」

「それに、……公爵からという手紙は、あちこちにインクを擦った跡があった。あれは、左利きの人間によくあることです。そして、薬草で私の手当てをしてくれた際、あなたの利き手も左だった。そして、今し方……その細身剣もまた、左手に握られていた」

クリフォードは手当てをして貰った掌を、ひらりと示してみせる。「ここまでして試すからには、それ相応の訳があったのでしょう？」

先程より一段軽い青年の声に、彼女は安堵したように胸を撫で下ろす。暫し視線を彷徨させたが、やがて、語りはじめた。

「……父上は……先代リムリック公爵は、一年前、側近によって毒殺されました。

父上の側近だった男は、オーティ公国に通じていたのです。調べたところ、他にも幾人も騎士が、他国の密偵と通じ我が国を狙っていたことを知りました。

私は絶望しました。何を信じればいいのか、……わからなくなった」

徐々に、か細くなる声。もういい、というように、クリフォードは背中を優しくたたき、制する。

「それで、信に足る『まことの騎士』を捜し求めた　というわけですか。

自由騎士ギルドに現れた甲冑の騎士も、あなただったのですね？」
青年のそれは質問というより、確認という物言いだった。案の定、はい、と彼女は首肯する。

「しかしここには、私以外にも多くの騎士が足を運んでいたはずですが……」

「全員、この手で首を刎ねました」

はつきりと、麗人はそう告げる。強い決意の色を秘めながらも、しかし何処か虚ろなその瞳に、クリフォードは胸がずきりと痛んだ。そうまでしなればならなかった、この美しい男装の麗人が背負う運命の重さに思いを馳せる。クリフォードは見かねて、僅かに震える肩をそつと抱きすくめた。腕の中に収めると、その肩の小ささに驚く。

この双肩に、国ひとつを背負っているのか。

「あの、……クリフォード……？」

「申し訳ありません。その、辛いことを……思い出させてしまっていて、いいえ、と、腕の中で首をふるふると横にする彼女。そして、

「もう少し……このままでいて、ください」

ほそほそと小声で呟くと、頭をすぼめた。その仕種が愛らしく、思わずクリフォードは微笑んでしまう。

「え、あ……あなたが、そう望まれるなら。」

ええと　公爵、とお呼びしたほうが宜しいでしょうか？」

「いいえ。幾らなんでも、こんなときにジェフリーはないでしょう？母上が呼んでくださったように、……ジェシイ、と呼んでください。」

いまは

はにかむように表情を崩し、そつと、寄り添うジェシイ。

「……でっ……では、ジェシイ様」

胸にもたれかかっていた彼女に内心ぎよつとして、鼓動と共に声も跳ね上がる。しかし、動揺を必死で押し隠そうと、抑えた声でその名前を呼んだ。

「クリフォード。私はあなたを欺き続けていました。でも……」

私の心にいるかたが、あなただと言ったのは　ほんとうです」

ジェシイは顎を上げ、そつ、と唇を寄せる。まるで、接吻くちづけを求めるところに……。

「あ、……ジェシイ……さま、……」

喉が、からからに渴かわいていた。予期せぬ甘い誘こほいに、クリフォードは今度こそ、限界を強く感じる。連夜の誘惑に辛うじて耐えきつた年頃の男に対し、それはあまりにも、あまりにも

「ジェシイ、さま　っ」

「ところでクリフォード。私も、疑問に思ったことがあるのですが」
びたり。

抱き寄せようとした腕は、何かを思い出したような彼女のひとことにも無情にも停止させられる。クリフォードは奇しくも、お預けを食った格好となった。

「え……は、はいっ？なん……でしようか」

「あなたは恩賞に、何を求めるつもりでしたのですか？」

首を傾げるジェシイ。クリフォードの全身から、冷や汗が噴き出す。

「そ、それは、……その、」

彼が恩賞に求めるつもりだったもの。それは、公爵夫人エスメラルダだった。しかし真実を知った今、彼女こそが公爵本人だと知った今　それを口にするには叶わなかった。

「……か、考えて……ありません、でした」

目一杯嘘を吐く。彼女はさして気にした様子もなく、そう、と短い相槌を打つのみだった。

「ねえ、クリフォード。その恩賞ですけれど……」

『私』でも　構わないのですよ？」

「えっ！な、お、お戯れを……」

後悔、という文字が、大きく彼の背中を押しつぶす。しかし続く言葉に、盛大に突っ伏した。

「ええ、冗談です」

嘘ではありませんけれど　、と添えた呟きは、幸か不幸か、クリフォードの耳に届くことはなかった。

巧い具合に唇付けるタイミングを逸した彼は、ちらとジェシイの唇を盗み見る。甘い口説き文句のひとつも知らない彼には、どうす

ればいいか皆目見当がつかなかった。

「……ふふっ」

くい、と青年の袖を引つ張り、ジェシイはねだるように唇を指で示す。示されるまま白く細い指を追い、クリフォードの視線はそのまま、鮮やかな唇に吸い寄せられた。

もうダメだ、そう思った。そして、卑怯だ、とも。

「……………よ、良いの……………ですか……………？」

なんとか声を搾り出す。

はい　とかたちの良い唇が返すのを目の当たりにし、クリフォードの中で抑えていたものが途端溢れ出す。ごくりと鳴った喉。よもや音を聞かれてはいないだろうかと、内心焦りを覚える。

花のつぼみを摘むように、柔な唇を傷つけぬように。逸る心を制して、そつと距離を詰める。

決闘のときより数段　いや、比べようもないほど、慎重に。

「あなたを……………想っていました。館でひと目見たときより、ずつと

静寂の中、ふたつのシルエットがかさなる。

森の木々が、祝福の調べを穏やかに奏でていた

かくして、騎士クリフォードはリムリック公国太守ジェフリーの側近となる。

仇敵オーティ公国を退けたジェフリー公爵とその騎士。しかしリムリック公国は一族の者に託され、ふたりは歴史からも人々の前から、忽然と姿を消したという。その後、ジェフリー公爵と側近クリフォードの消息はどの記録にも残されていない。

ほぼ同時期。イングランドに亡命した、若い夫婦がいた。働き者の夫は畑を耕し、妻は美しい歌声とフィドルの音色で村人の人気者となったという。

後篇 君がために（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

執筆時、18禁にするか否かで悩んだりもしたとかしなかったとか。ラストを変えた18禁varを書く可能性も、そのうちなきにしろあらず……です。

もし「いやそこは書こうよ」「って方がいたらこっそりと（笑）。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8778b/>

騎士の証

2009年5月29日04時31分発行

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。